

新しい世界へ

第3章



新しい家

少しずつ暖かくなって、吐く息も白くなくなってきたころ、僕はこの家にやってきた。カゴの中に入れられて、揺られているうちに眠ってしまったのか、そのときはあまり覚えていない。ただ、遠くでママの声がいつまでも聞こえていたことは今でも覚えている。

僕をこの家に連れてきたのはKというニンゲンだ。Kとは、ママと一緒にいたときに、じつは何度か会っている。この家に到着した日の僕は少し緊張していたが、好奇心に負けて、こっそり部屋の中を探検した。あの柵の中のおいはもうどこにも見つからない。もうママとは会えないんだろうかと思いつつも、部屋のおちこちに置いてある魅力的なおもちゃを見つけることにうっかり夢中になってしまった。おもちゃを噛んだり振り回したりして遊んでいたが、そのうち、疲れてまた眠ってしまった。

Kがきょうだいたちの中から僕を選んだ理由はよくわからないが、正直なところ僕がまったく知らないところで事が進んでいたことは気に入らない。もちろん、あのころの僕はまだ小さかったし、

突然のこと、なにが起きたのかもよく理解できていなかったが。なぜか柵の中で遊んでいたぬいぐるみもこの家についてきた。ぬいぐるみにはママやきょうだいのにおいがしみついているから、さびしくなったらそれを嗅いだりして、気を紛らわしていた時期もあった。でも、しだいに僕は、この家が僕の家であることを受け入れていった。ここが安全な場所だとわかったし、なによりなにもかも僕が独り占めできることに満足したからだ。

Kは、この家に来たばかりの僕にしばらくはあまりかまわず自由にさせてくれていた。この家にはいろいろなおもちゃが用意されていて、それはそれで噛むというんな音がしたりして楽しかったのだが、なんとなく、そうじゃないものをガリガリしているほうが僕には楽しかった。歯がむずむずし始めて、なにか固いものを噛まずにはいられなかったという事情もあった。Kはよくおもちゃで遊んでくれたが、僕はおもちゃよりも、おもちゃをもったKの前足を噛んだときのKの反応がおもしろかった。ただ、歯のむずむずがおさまったのもあるけれど、何度か繰り返しているうちに、なるべくKが嫌がるものを噛むのはやめたほうがいいのだろうということがわかってきた。今まで僕はママやパパ、きょうだいの間でのいろいろなルールを覚えてきた。みんな、僕がなにを噛もうともいっこうに気にしなかったが、ニンゲンにとっては「おもちゃ以外は噛まない」というのは重要なルールなのだろう。

その代わり、Kは僕のルールも尊重してくれた。僕は白いシートの上でじょうずにトイレをした
いし、それは寢床からうんと離れたところじゃないと嫌だ。そして、寢床はひとり静かに過ごせ
るけど、安心できる場所がいい。Kは僕のそんな希望をかなえてくれた。ただし、ときどきKは僕
をひとりぼっちにして出かけてしまうことがある。そんなときは、我慢していたことをたくさんし
て、僕にさびしい思いをさせたことを後悔させてやるのだ。

こんなふうに、僕とKの共同生活は意外と順調にスタートした。

「コーディー、おいで」

Kが呼んでいる。相変わらずニンゲンのいっていることはよくわからないが、「コーディー」と
「おいで」といわれたときはどちらもKの近くに早くいけばいくほど喜ばれる。あの声の調子だと、
外に遊びにいきたいのだろう。僕がこの家に来たときに比べてうんと暑い日が続いているが、まだ
この時間だと空気が涼しい。一緒にいってやらねばなるまい。

僕は急いで声のするほうへ走っていった。

いよいよ子イヌがわが家にやってきた！ 長い道のりをひとり、クレートに入れられて、車で揺

られてきたのがつらかっただろうに。よだれだらけで、気持ち悪そうな顔をしていた。扉を開けても、いっこうに出てこない。知らないところだからしかたないだろう。イヌの部屋を新調した。こは、今日からコーディーの部屋だ。その端にクレートを置いて、少し離れて、私は床に転がり、コーディーが自分から外に出てくるのを待つ。クレートのそばには水のみと餌皿。ブリーダーさんから受けたアドバイスに従って、快適な居住空間とトイレを離すため、トイレシートはクレートから離れたところに設置した。いろいろと考えた末、おもちゃとしてブタのぬいぐるみや固い木の棒を買ってきた。ブリーダーさんの心遣いで、親きょうだいのにおいがたっぷりしみついたぬいぐるみも一緒に持ってきた。これは貴重。クレートの中に入れておいた。

しだいに周囲に興味が出てきたのか、顔を出してきた。それでも不安そうに、周囲を見ている。私は寝たふりをして、自然に出てくるのを待った。五分だろうか……一〇分だろうか……ついに体も出てきた。やさしく声をかけ、あとは自由にさせた。そう、イヌを飼う前に決めたことがある。イヌはヒトとの生活に長けた、それも世界でもっともその能力を得たものなのだ。だから、彼にヒト社会とのあり方を自ら学んでもらおうと思った。一般的な飼育書とは真逆の方針。だが決断したのだ。なので、家の中のルールを教えないことにした。ルールがないわけではない。壊されたら困る家電もあるし、噛まれたら困る家具もある。なにがルールかを自分で学ぶように仕向けようと思った。言うは易く行うは難し、どうしても過剰にかかわりたくなるが、ぐっと我慢である。

到着初日、一時間程度周囲を歩いたら、コーディーはそのままクレートに寄りかかって寝てしまった。その安らいだ顔を見て、私も一安心であった。

最近読んだ本におもしろい研究が書かれていた。ヒトや動物が学習する際、大きく二つの方法があるという。一つは同じことを繰り返しながら覚える習慣的なもので、モデルフリーと呼ばれている。ああすればこうなるという学習をするのだが、これはたとえば「イヌがお座りをしたらおやつをあげる」を繰り返したら、イヌがお座りするようになった、などが該当する。同じことを繰り返せるように、報酬（この場合はおやつ）を与える。これを強化学習という。強化学習では報酬が必要なのだが、この報酬がじつは問題も含んでいて、場面と行動の関連性をかなり特異的に覚えてしまう。つまり「あ、この場面では座っていようかな」という判断はできず、「お座り」といわれて餌を見せられたときだけお座りする。これに対して報酬は少なめ、自分自身で判断させて、自分から行動を起こしてその結果の良し悪しを理解しながら覚えるものをモデルベースという。たとえば、飼い主さんが椅子に座っているときに、隣で伏せをしたら飼い主から「Good」と軽くなでてもらうなどを繰り返す。イヌには過度の報酬を与えないし、自分で判断させて「伏せ」をしてもらう。こうすると、イヌがどのような状況ではどうしたらいいか、自分で判断して行動できるようになる。つまり脳の中に「こういう場合はこうするのがよい」というモデルができるらしい。臨機応変に対応できる能力が備わるのだ。さて、そんなことは知る由もないまだまだ小さなコーディーに「好き

にしろ、自分で学んでね」と期待を託した。

最初の一週間はあまり無理せず、彼のペースで生活させた。声かけだけはたくさんした。おはよう、どうだい？ ただいま、おやすみ。そう、新しい家庭内のパートナーへの挨拶だ。散歩に行くときも、最初はいきたいところにいかせた。それでも、怖がりのせいかな、なかなか歩かない。家を出るとすぐに座り込み、もう帰るという。それでは社会化が進まないのだから「コーディー、おいで」といって、誘ってみる。しだいに歩く距離は伸びたが、車の音、町の騒音がするたびに立ち止まる。自分自身で、なにこともないことを確認すると歩き出す。こうやって、新しい世界、新しい生活環境の中で自分にとって悪いものではないということを学んでいくのだろう。それが確認できると、楽しそうに歩き出す。そう、これからの彼の世界が楽しいもので満たされるよう、私もあせらず、ゆっくりと協力していこうと思った。

コーディーが家にきてから四カ月が過ぎ、暑い季節となった。動物病院の看護師さんから呼び戻しのトレーニングを教えてもらったので、毎日、家の中で練習した。自由に遊んでいるときに名前を呼んだ。コーディーがこちらを注目したら、さっそくほめる！ 近づいてきたらほめる！ 最後はなでておやつをあげる！ だ。最初は不思議がっていたコーディーも呼ばれるといいことがあるらしい、としだいに呼び戻しに反応するようになった。そうやって、彼を呼んでから、散歩へと出か

けられるようになった。

春先から気候もよくなり、ゆっくりと散歩して、新しい草木や花の香りを楽しみながら、散歩した。公園では、イヌのリードを離してもいいところがたくさんあったので、自由に走らせてみた。最初は怖がっていたものの、慣れてきた公園ではあちらこちらに残されている先にきたイヌたちの排泄のあとのおいを楽しむように走り回った。そんなときに呼び戻しをトライしたが、におい嗅ぎが忙しいので、ほとんどの場合、無視された。やれやれ、価値判断からいうと私の呼び戻しはまだそんなに重要なことではないようだ。

色・音・におい

Kと僕は毎朝公園に行く。そこには僕と同じ生きもの、イヌがたくさんくるのだ。柵で囲われた芝生広場で、僕たちは情報交換をしたあと、自由に走り回ったり、においを嗅いで回ったり、追いかけてっこをしたりして、思い思いに遊ぶのだ。しばらくは雨のせいで広場にこられなかったから、暇を持て余した僕は家の中でさんざんいたずらをしてKを困らせてしまった。最近はお天気もよくなって、でも、日中はとても暑いので、公園にくるのは早朝だ。ここにきたばかりのころの僕は小

さすぎてKに抱かれたまま、みんなが楽しく過ごしているのを柵の外から見ているだけだった。最初に柵に入って、順番に大人のイヌたちに会ったときは緊張したが、ママが教えてくれたとおりにおなかを出してじっとしていたら、みんなすばやく僕のおいを嗅いで、なにこともなかったかのようにまた遊び始めた。僕は無事に試験に合格し、今ではすっかりこの公園の仲間の一員となったのだ。

今日のKは、僕の大好きな「クジラボール」を投げて遊んでいる。Kは投げっぱなしなので、僕が拾いにいってやらねばならない。これは青と白がはっきり分かれていて、芝生に落ちててもわかりやすいし、拾ってきてやるついでに軽く噛むとキューキューと音が鳴るのが楽しくて、僕はKにボールを渡して、もう一度投げるように促す。Kは公園におもちゃをいくつか持ってくるのだが、その中には、芝生と同じような色で、地面に落ちたら探しづらいものもある。だから、そんなボールで遊ぶとき、僕はボールが空を飛んでいる間に必死にキャッチするか、芝生に落ちて転がっている間に探さないといけない。それはそれでスリルがあって悪くはない。僕は動いているものはすぐに見つけられるけれど、動かないものを探すのは苦手なのだ。あと、できるなら真昼の明るいときよりも、少し光が弱い朝や夕方が好きだ。ニンゲンは暗くなるのが怖いのか、すぐに家に帰りたいがるけど。

ニンゲンは僕たちとだいたい同じものが見えているようだが、においや音についてはいまいちだ。草陰にひそんでいる小さな生きものの声はニンゲンにはあまり聞こえないらしいし、町の中の耳障りな音はまったく気にしていない様子だ。そして、においについてはよほど強くないとだめらしい。僕たちにはおいで相手のことやなにが起こっているかを理解する。風に乗ってきたにおいで警戒すべきかどうかもあるし、地面や草むらのおいだって、僕たちがうまくやるための重要なてがかりだ。ニンゲンだって、においのサインを出している。調子が悪そうなときはなんだかそんなにおいがする。においでだれなのかも判断できる。でもニンゲンにはそれがまったく理解できないらしい。Kは、せっかくのにおいを毎日洗い流してしまっし、なかには変なおいをブンブンさせてくるニンゲンもいる。音とにおいが伝わらないから、僕たちはニンゲンがわかるように行動しなければならぬ。そして、ニンゲンの反応を見ながら、ニンゲンが望んでいること、嫌がっていることを試しながら学んでいく。僕はまだまだ自分がやりたいことを優先してしまっけど、やっぱりなるべくならKが嫌がることはしたくないし、うれしそうな顔を見たいと思う。

広場の入口付近では、僕の知らないやつのおいがした。僕がきたのとは反対にいったようだ。柱ににおいの印がついていたので、念のためにその上にいいねいに僕のおいをかけてやった。こは僕のテリトリーだということをしっかり主張しておかねば。

コーディーを連れて歩くのはほんとうに楽しい。彼の世界はまだまだ楽しみと好奇心に満ちあふれていて、彼がなにを感じて、なにを覚えるのかを想像しながら、一緒に歩く。もちろんイヌの嗅覚はヒトのそれに比べて圧倒的に高い。外に出ると熱心に階段のにおい、芝のにおい、先に歩いたイヌのにおいを嗅いでいる。古い尿と新しい尿の違いはもちろんのこと、オスとかメスとか、年寄りとか若いとか、犬種の違い、病気の有無までわかるといわれている。なんとも、ヒトでは考えられない能力だ。公園の入口や道端の電柱など、みんながこぞってにおいを嗅ぐところがある。そこはきつとヒトでいうと、人気のブログのようなもので、だれがなにを伝えるメッセージを置いていったのか、それに対してだれが上書き（尿をかける）したのかがたんまりと記録されているらしい。コーディーもまだまだひよっこながら、そんなイヌ社会の一員になってきたらしく、まだ弱いしい足上げをして、おしっこをかけていく。残念ながらおしっこは狙った電柱から外れてしまい、メッセージとしては貧弱なものかなあと思う。

公園のボール遊びは楽しい。噛むと音の出るおもちゃは、おそらくイヌの狩猟本能を刺激するのか、一生懸命探して捕まえる。イヌの視力はヒトの五分の一から一〇分の一しかないが、その代わり動体視力は優れている。おそらく色を見るための錐体細胞が少ない分、明暗を見分ける桿体細胞が多くて、影の動きに対して敏感だからだろう。イヌの錐体細胞では、ヒトでいう赤の波長に反応する細胞がないため、イヌの色覚の世界は二色刷りである。赤と緑の違いなどが見分けられない。

なので、芝生に赤いボールを転がしても、あまりよくは見えないらしい。ボールが止まるとすぐに見失っている。お気に入りは白と青のコントラストがしっかりしているクジラボール。よく見えるし、噛むと「キュー」という。ネズミを捕まえたような気になるのか、一生懸命だ。夕方になって、コントラストのあるものはしっかりと捕まえてくる。これはおそらくイヌの目にはタペタムといわれる組織があり、目に入った光を増幅させることができるから。暗闇でイヌの目が光って見えるのも、このタペタムの反射光である。

音に関しても、イヌのほうが感度が高いようだ。草むらで葉のすれる音や、虫の声に耳を傾けている。おそらく獲物をとらえるときに大事なシグナルだったのだろう。確かに、牧羊犬などは高い音にも反応するので、「イヌ笛」と呼ばれる高音域の音を使ったシグナルで、調教されている。いろんな感覚器の違い、それはイヌがこれまで生きてきた世界観をかたどったものの集大成。ヒトとは違った世界を持ちつつも、おたがいが重なる世界で生きる、そんなことを考えながら、今日の散歩は終点の家の扉へと到着。さ、足を拭いておうちに入って、夕飯にしよう。

おやつのゆくえ

朝からとても暑かった日に、クリーム色をした子イヌが一頭、家にやってきた。ちょうど僕がこの家に来たときと同じくらいの年齢だろう。いつ帰るのだろうと思っていたら、どうもそのままこの家に住むらしい。僕がきたときと同じように、部屋に白いシートがたくさん置かれ、新しいベッドが用意された。

冗談じゃない。僕はひとりでの家での生活を満喫していたのに。なぜ相談もなく、勝手なことをするのだろう。このおもちゃもあのぬいぐるみも、全部僕のものなのに。Kが僕のおもちゃを一つ取り出して、子イヌに渡した。おもちゃがなくなってしまうかわないか、僕がじっと見張っていたら、子イヌはおもちゃを噛みながら勝気な目で僕をちらりと見た。

Kは気づいていないが、これは宣戦布告に違いない。嫌な予感がした。

僕の直感は正しかった。新入りはアニータと呼ばれるらしい。僕のをなんでも欲しがった。僕の大事なクジラボールを欲しがり、僕のベッドの毛布を奪い、僕だけがもっていたおやつも横取りしようとした。そして、なんといっても許せないのは、僕がKと一緒にいると、その間に割って入ってこようとすることだ。軽く噛むふりをして追い払おうとしたが、うっかり歯が強くあたってしまった。アニータはキャンと声を出しておなかを見せた。僕の中の最上位のルール、おなかを見せている相手には手出しをしないこと。一応礼儀はわきまえているらしい。くやしいけれど、許

してやるしかない。

Kはときどき、両方の前足を握って僕の前に差し出す。おやつを食べるときの儀式だ。どちらかにおやつが入っているので、正解をあてられたらおやつにありつける。Kはにのびのびがかりをなくすためののか、おやつを一つ両前足で数回持ち替えて、僕にわからないようにしてどちらかの前足に隠す。残念ながら、僕が本気でおいをかけば、どちらに入っているかはすぐにわかるのだが。さて、どちらだろうといつものようにじっくり調べようとしたら、いつのまにか隣にきていたアニータがあったという間にKの右前足にかじりついた。開いた右前足にはなにも入っていなかったのだ。僕はKの左前足に恭しく僕の右前足を重ね、無事におやつを食べることができた。

その後、二回、儀式は繰り返されたがどちらも僕が正解をあてた。アニータにはまだこの儀式がよくわかっていないようだ。すると、Kはアニータの前におやつをかざした。これはKが僕を座らせたいときにするしぐさだ。だから、僕はアニータよりもすばやく座ったのだ。それなのに、僕はアニータよりもきれいに座ったのに、Kはアニータにだけおやつを与えたのだ！ しかも四つも。なんとこの不公平！

僕は抗議のために、しばらくの間はKのいうことは聞かないことに決めた。

コーディーも生後半年になった。思った以上に楽しい生活だ。彼の感じることを、考えることがしだいに手にとるように感じられるようになってきた。子イヌは毎日、におい嗅ぎ、遊び、探検に大忙し。それでも飼い主との関係も大切なようで、なにかあるとジーっと目を見つめてくる。目を見られるとなんだかいとおしく、かわいがってやりたくなる。体の中の育児スイッチが押される感じだ。

当初から、コーディーにかわいいお嫁さんを迎える計画であった。それでもできれば違うタイプ、ということ、アプリコットカラーのメスを探した。運よく、かわいい子イヌを紹介してもらい、無事に家に迎えることができた。ブリーダーさんとのやりとりも、コーディーのときと同じくとても親密に、信頼を持って行うことができた。そしてアニータがおうちにやってきた。

コーディーのときとは、様相がまったく違う。コーディーは、着いたとき、移動中の振動に耐えず、ゲロまみれ、とても不安そうでかわいそうな姿であった。一方、アニータときたら、へらへら顔で、やつほ！といわんばかりの笑顔。後にわかる彼女の持つ、正真正銘の楽天家、ポジティブシンキングは出会いの瞬間から明瞭に表れていた。

二頭の、というかふたりの絡みは、見ていてまったく飽きない。ほんとうに楽しい。アニータは明らかにコーディーを追って、そして「真似」をする。社会的参照というようだが、年長あるいは親のやることを参照しながら、新しい環境に対して、より効率的に適応していく。そうはいうもの

の、さすがにコーディネーとは同じことをすぐには学べないようで、コーディネーの天才的な行動選択に比べて、お気楽な感じの行動を示すアニータ。コーディネーが少しやきもちをやいたり、マネされることをめんどろうにするのもまた楽しい。

巷で有名になっていたイヌと遊べる知恵テストをやってみた。まずは手の中におやつを隠して、そのおやつが見えなくても、まだ中にあることを理解しているかを見てみた。おいがするからか、ずっと握りこぶしに執着している。ふむふむわかるらしい。テーブルの上からおやつを落として、その途中で袋に入れるようにしておく、床に落ちたものと思うのか、必死に床を探している。物体がニュートン力学に従って落下、途中から見えなくなってもどこかにある、という感覚も持っている。ヒトでいうと、物体の永続性の理解、ということらしい。物体は突然なくなることはなく、その永続的な存在を予測して、たとえば落ちたと思ったものは床にあるはずで、その途中で消えることはない、と思って床を探すことになる。つまり、人間が突然消えてなくなるマジックを見て驚くように、イヌも驚くのだ。最近、イヌの目の前で飼い主が毛布で姿を覆い、毛布を離れた瞬間に隠れるという遊びも流行っているらしい。これも飼い主という物体の永続性を予測したイヌとの遊びである。

次はこれ。三つのタッパーにおやつを入れておいて、一つだけ食べさせる。なくなったことがわかった時点で一度、部屋から退出。その後、再度部屋に入れてみた。すると自分が食べていないタ

ッパーに向かっていった。食べたらなくなった、というのも（あたりまえといえば、あたりまえだが）わかるらしい。こういう知恵比べ的な遊びも、コーディーは楽しいらしく、集中してやってくれる。そしてその天才ぶりを発揮していた。一方、アニータといえば、もらえなくても「かわいいから私には特別にいつでもくれるでしょ」と持ち前の前向き思考を発揮して、へらへらしていた。これはこれでやっぱりかわいい。

ふたりと一緒に暮らしていると、その個体間の関係も観察できる楽しみがある。集団で生活し、共同で狩猟や採食をする動物では、不平等嫌悪というものがあると聞く。これは集団で取得した餌資源が平等に分配されない場合に、嫌悪反応を示すこと。ヒトではもちろん広く知られており、イヌも不平等嫌悪が認められる。お手やお座りをしたのに、自分は餌をもらえず、隣のイヌだけが餌をもらっているのを見ると怒り出すという。実際にやってみると、すぐさま、コーディーの顔色が……笑顔から真剣に、そして嫌そうな横目でにらむように変化していった。なるほど、これか。でもかわいいそうだから、これからはこんなことはやめようと思った。かわいいそうなことをした。

目じるし

アニータは、芝生広場でも好き放題だ。ニンゲンたちにちやほやされているのをいいことに、調子に乗ってほかのイヌたちにも絡んでいる。なにか不都合があればおなかを出せば許されると思っているところが腹立たしい。クジラボールをねだられるのが嫌なので、僕はアニータを振り切って、いつもの仲間たちと追いかける。さすがについてくることができず、アニータはうらめしそうに遠くで吠えている。

この芝生広場は広い。柵でいくつかの広場に仕切られているが、普段は柵の扉が開いているので、いろんな広場をいったりきたりして追いかけることができる。広場の中には茂みや林もあるので、追いかける間に夢中になって、自分がどこにいるのかわからなくなることよくあった。最初のころはびっくりして、むやみに走り回ったりしたものだが、最近は遠くに見えるあの山の方向にいれば、たいていは入口の近くの広場に帰れることを発見した。僕はよくKと一緒ににぎやかなところにも散歩に出かける。大きな塊が勢いよく動いているのでなかなかスリルがあるが、今ではすっかり慣れた。広場と違って見通しは悪いが、だいたいいつも同じ場所を歩いているので、たぶんそこから

ひとりで帰れといわれても見慣れた建物が目印になるので大丈夫だろう。

今日もアニータを振り切るために、僕はクジラボールを咥えたまま全速力で茂みに向かって走った。振り返ると、柵の向こうでアニータが僕を探している。茂みがじゃまで向こうからは僕の姿が見えないのだろう。一生懸命探している姿を見ていたら、なんだかわいそうになって、クジラボールを茂みの陰に置いて、茂みを飛び越えた。僕が姿を現すと、アニータはうれしそうにわざわざ柵の入口まで戻って、こちらに走ってやってきた。もう少し先に進めば、僕がいるところに近い柵の切れめがあるのに。アニータはまだ小さいので、そのあたりの勘がまだ今一つのようなのだ。このままではクジラボールが見つかってしまうので、僕は先にアニータのほうに走り寄って、そのまま違う方向に走っていった。クジラボールはまたあとでとりにしよう。

子イヌのころは楽しい運動が必要だろうと、近くの公園に連れて行って、ドッグランで走らせてあげた。ふたりとも無尽蔵の体力を備えているのか、炎天下でも水を飲みながら一、二時間、止まることなく走り続けている。アニータはコーディーを頼りきりで、コーディーが茂みで見えなくなったり、彼が超特急で遠くまでいったりすると、どこー？ってというような感じで吠え続けている。

ふたりの距離は最初に比べるととても近くなってきたが、まだ家族というほどではない。アニータはコーディーを頼っているが、コーディーはまだ守ってあげる、というところは見られない。それでもしだいにアニータのことを気にかけてあげているようだ。イヌは数回こういう広場になると、だいたいの地形を覚えるらしい。なにを手がかりにしているのかわからないが、一周ぐるっと回ってきて、もとに戻ることや、近道などもすぐに覚える。街中を散歩していても、一度歩くと、「次はこっちでしょ」と案内までしてくれる。やはりまだ野生の能力が残っているのか、人間と同程度か、それ以上の空間定位能力を備えているらしい。それだけではなく、動物は地磁気も感知できるとして、その記事はほんとうにおもしろかった。三七種のイヌ七〇頭を対象に、二年間で一八九三回の排便と五五八二回の排尿を調査したらしい。イヌは東西の向きは好きではないらしく、体を南北に沿わせて排泄することを好むことがわかったという。はたしてどういう意味があるのか、人間では考えられないが、彼らの持つ地理認知、移動能力は、やはり優れているのだろう。しかし、そんなものを微塵も見せないアニータのお気楽な生き方も、ある意味、興味深い。

仲間

芝生広場には友だちがたくさんいる。耳が立っていたり、長く垂れていた。しっぽが丸まっているイヌもいれば、動くたびに毛がひらひらと優雅に揺れるやつもいる。顔の形、毛の色、体の大きさもさまざまだ。僕の足や体は、黒くてふわふわしている。いつもお湯で洗われて、温かい風に吹かれながら毛をひっぱられて整えてもらうのだが、必ずしもみんながそれをしなければならぬわけではないらしい。ちなみに、水に濡れると僕のふわふわはくるとカールする。僕は水を見るとつい飛び込みたくなるが、そうするとKがちよっとあわてるので、我慢できるときは我慢するようにしている。

僕たちの仲間は毛の様子や色で性格もなんとなくわかるような気がする。耳が三角に垂れた太めのしっぽを持ったやつらは、あまり細かいことは気にせず、たいていのイヌと気があうようだ。彼らはせわしなく動き回り、優雅ではないが、陽気で楽しい。僕はどうも、薄茶色をした小さな三角耳の、しっぽがくると巻いたやつは苦手だ。なにを考えているのか、わからない気がするのだ。あと、僕と同じふわふわでも、黄色っぽいのは遊びが激しくて、最後までつきあうのはなかなか骨が折れる。鼻がとびきり低くて、いつもフガフガといっているちよっと不格好なやつらは、どこを見ているのかがよくわからない。興奮したら体あたりをしてくるので要注意だが、基本的には楽しい遊び相手だ。

でも、見た目だけで単純に判断できないので、僕は初対面の相手はおいをしっかり確認してか

ら遊びに誘う。あまりけんかをするのではないけれど、それでもときどきそのあわないやつがいる。やっかいごとは苦手なので、そいつがいるときはなるべく近寄らないようにするし、こちらに敵意がないことを示してやりすごす。

僕はあまりニンゲンのことは気にしない（ときどきおいしいものをくれるニンゲンのことはちゃんと覚えているし、礼儀正しく挨拶もする）。だが、なかにはニンゲンが苦手なイヌもいる。事情はよく知らないが、おそらくニンゲンに嫌な思いをさせられたのだろう。ときどき、無理やり挨拶してくるニンゲンもいるが、ニンゲンは僕たちのように鼻が利かないらしいし、すばやい動きを読み取ることも苦手なようだ。だからルール違反を犯すこともある。こんなときはニンゲンとイヌとの違いをあらためて感じるが、できないことを求めてもしかたがないので我慢するしかない。イヌにはイヌのルールやプライドがあるのだから、じゃまをしないでほしいと思うこともないわけではない。

昨日、家に帰ってからクジラボールがないことに気がついた。アニータがとったんじゃないかといろいろと探し回ったけれども、もしかしたら広場に置いてきてしまったのかもしれない。だから今日は、アニータのことは放っておいて、広場をうろうろと探していた。そのとき、今まで聞いたことのないようなアニータの悲鳴が聞こえてきた。

急いで、悲鳴がするほうへ走っていったら、アニータが黒い二頭のイヌに襲われていた。僕も知っている、短くてつやつやとした毛をした、耳が三角に垂れた太めのしっぽを持ったイヌたちだ。普段は楽しい遊び相手なのだが、僕の体は勝手に動いて、そのうちの一頭の首元狙って飛びかかっていた。

ドッグランにはいろんなイヌが遊びに来ている。ラブラドル・レトリバーやゴールデン・レトリバーなど、いつも楽しそうに、しっぽをぶんぶん振りながらへらへらしている。柴犬は少し雰囲気の違い、すぐに「マジ」になる。真剣な顔をして、遊びも半端ない。一番よくわからないのは、フレンチ・ブルドッグやパグ。笑っているのか、つらそうなのか、いつもゼイゼイしていて、少しかわいそうである。イヌを飼い始めてから、さまざまな犬種を覚えた。そしてその犬種の成り立ちもおもしろく読みふけてしまう。たとえば、ダックスフンドはよく吠えるが、もともとアナグマのための猟犬で、巣穴に入って吠えてアナグマを追いつけ出す仕事をしていたらしい。なので、彼らにとっては、吠えることが遺伝子に刻まれた仕事なのだ。遊びを見ると、柴犬のような遊びなのかけんかなのかよくわからない。厳しい行動を示すものから、パグのような緩すぎでなにを意味している行動なのか理解するのがむずかしい犬種までいるが、これはどうやら犬種がどれだけ家畜化さ

れているかによるらしい。柴犬はじつは、オオカミに近い犬種で、複雑な（真剣な？）遊び行動のレパートリーを持っている。一方、フレンチ・ブルドッグはもともと家畜化が進んだ犬種グループで、行動のレパートリーが少ない。おそらくイヌどうしのコミュニケーションもうまくとれていないのではと思ってしまふ。人間が見ても怒っているのが歴然としているイヌに対してもへらへらしている。大丈夫かなと思うと、やっぱりそのあとに怒られていた。どうやら、イヌの遊び行動の相性もあるみたいだが、その半分くらいは犬種差のような気がする。なかには絶対負けたくないというイヌもいて、こういうイヌもあちこちでもめごとを起こす。イヌの世界も、譲歩が大事ななんだろうと思って、つつい人間社会を投影して見てしまふ。

なかにはヒトが苦手なイヌもいる。嫌な思いをしたことがあるのか。あるいは小さいころの社会化がうまくいかなかったのか。イヌの社会化は、ヒト社会で生きていくための術を身につけるようなもので、掃除機の音や（わりに怖がるイヌもいるらしい）、知らないヒトとのかかわり方が身につく。飼い主しか知らない、知らないヒトに恐怖を感じたり、攻撃的になったりもする。じつは、コーディーとアニータは動物病院で社会化のしかたを教えてもらったし、動物病院に対しての社会化もとてもじょうずにしてもらった。受付のお姉さんが、たくさんほめて、おやつをじょうずに与えてくれたことで、ふたりとも動物病院が大好きになり、散歩中にくいくといっって聞かない。それでちょこっと立ち寄ると、またお姉さんがおやつをくれる。こうやって動物病院での診療や注射

もなんら怖くなく、どちらかというと楽しく実施できるようになった。なるほど、社会化は大事だ。

ある日、公園で遊んでいると、アニータが黒のラブラドル・レトリバーに囲まれ、突然集中砲火のような攻撃を受けた。おそらく家族のラブラドル・レトリバーだったのだろう。アニータが彼らのおもちゃで遊ぼうとしたその瞬間、アニータめがけてラブラドル・レトリバーが噛みついてきた。アニータが少し成長して、大人個体の群れへの侵入者として見なされたらしい。イヌにはイヌのしきたりやルールがあるので、どこかの一線を越えると、ほんとうに激しい攻撃が起こったりもする。次の瞬間には、コーディネーがアニータに加勢していた。それも激しく吠えながら噛みついていった。すぐに止めに入ったため、大事にはならなかったが、それ以来、アニータは黒のラブラドル・レトリバーが大嫌いになってしまった。小さいころの記憶は、なかなかやっかいである。